

## 幼児の攻撃性

友定 啓子

はじめに

前回の自分の文章を読んで、暗くなってしまった。こんな風に幼児を見なければいけないことにある。

今まで、幼児について書く機会は何度もあった。し

かしそれは、たいてい幼児の持つ明るさやけなげさの自分なりの発見であって、複雑ではあるが、基本的には成長への動因をたくさん持っている存在として私は幼児を見ていた。そういうある程度安定している幼児たちへの対応は、大人はあまりこだわらずに自然体でのぞめばいい、生活リズムを整え、あれこれ押しつけ

ないで、その意欲を育てていけばだいじょうぶと、楽天的であった。大人の教え込みによるゆがみを起こさないように、自戒していればいいのだと思つてきた。

たぶんそのことは基本的には変わらないのであろうけれども、最近、それだけでは、目の前の子ども達を理解しきれないと思うことが増えてきた。子どもの持つ負の部分をきちんととらえていないと、援助できないことがあると思うようになってきた。子どもの持つマイナスの姿をきちんととらえ、その中にプラスの芽を見る視力が保育者に必要とされると思うのである。

### 遊び感覚の攻撃

ところで前回、私はもう少しで、勇み足をするところだった。幸運なことに、原稿の下書きを保育者と討論する機会が得られて、それは避けられた。何かというと、攻撃的な行動で大人に向かつてくる子ども達も、基本的に不安定で、充実した生活をしていない子どもだと断定していたのだった。

保育者から異議が出た。多くはそうかもしれないが、必ずしも全部そうとは限らない。実はその時、ある男子学生が子ども達から集団で攻撃をしかけられていた。そういわれれば、その子どもたちはどちらかといえば、よく遊べていて、友達も多く、ある子はリーダーでさえあつた。一緒に遊んだこともあるが、どんどん遊びのイメージを出す子であつた。この子といえば遊びが進むというタイプの子だった。

そんな子がどうするかというと、「仮面ライダーをやっつけに行こう！」と友達を誘い、集団でその学生をやっつけに行くのであつた。要するに遊び感覚なのである。その学生は体も大きく、幼児に少々やられたつてどうってことはない、子どもに対応していた。少々手ひどいことをされても、痛いとか、やめなさいと言ふことは考えになかつたらしい。それが、子ども達の遠慮のない行動につながつた。悪気はないよいうだが、やるのがエスカレートしていった。友達に指示を出し、抵抗しないその学生に襲いかかるので

あった。

### 自分の思いを出さない学生

私は私で、その学生が理解できないでいた。ずっと前から、そんなことをされたときには、ちゃんとやめるように言わなければならぬと言っているのに、いつこうにそれを受け入れる気配がないのであった。

子ども達の行動はエスカレートし、私は保育参加を中止させた。そういう行動を子どもにさせること自体が問題なのだと言っても、わからないようだった。別に意志の弱い学生とは思えず、誰よりも熱心に幼稚園に行き、他の場面ではむしろ逆にしっかりしているように見えていただけに、私には意外で納得がいかなかった。

この学生は、解決は簡単だと言った。自分が強い立場になって、子どもに向かえばいいのだと。しかし絶対それだけはしたくないと、固く決意していた。子どもにはいけないことだとわかってほしい、でも口が避

けても自分からは言わないと決めていたようだった。自分の思いを口にし、やめるように強い立場でいうことによって、子どもとの関係が切れるとおそれているのだった。何よりもそれだけは避けたいことらしかった。

### 子どもと対等になるといふこと

ほんとうに子どもと人間として対等になるといふことを、わかっていないと私には思えた。子どもに注意することは、上位に立って物事をすすめることだと思つて、それはできないのだった。対等な人間関係ならば、自分の気持ちを伝えられるということが納得できないようだった。上か下かしかないのであった。子どもに対して上からものを言つては、関係が切れると思つているらしかった。ふだんの人間関係にそういう見方をしているのかもしれない。そういえば、ここ最近、子どものことを話すのでさえ、討論が進まないと思ふことがあった。学生達は、人に意見を言うときに

は正しいことをいわなければならぬと思っ  
ていた。わからないから人に質問をして、はつき  
りした答えが得られなくても、それで引つ込んでしま  
う。自分はこう思うけれども、あなたはどうかと  
いう問いかけはとんとなくなつた。要するに相手と対  
峙しないのである。

子どもにきちんと注意しないのに、子どもにはわ  
かつてほしいと切に望んでいる。いつかわかつてくれ  
ると思つているようであつた。対決しないで相手か  
ら変わつてくれることを望むなんて、そんな関係を守つ  
てなんになると私は思うけれども、それが精一杯だつ  
たようだ。彼が最後にやつと行き着いた結論は、自分  
は人間としての素直な気持ちを言う前に、強い理想論  
にしばられていたということだつた。



### 大人の対応と子どもの行動

そうはいつても、子どもの方だつて問題ではないか  
と思つた部分もあつた。抵抗しない学生にみんなで襲  
いかかつていくなんて、どう考えてもおかしいと思  
えるのである。

実は、これとよく似た学生が前にもいたのだつた。  
彼は、実習の間中、子ども達に使い走りややらされ  
た。二人に共通していることは、子どもにことばが届  
かないことであつた。いやなことをいやだと言わ  
ない、子どもにやめなさいと注意をしても、そこに意志  
が込められていないので、ことばがうわついで、子ど  
もに届かない。そして使い走りを命じていたのは、や  
はり有能な、ほんとはよく遊べる、さしたる問題のな  
い子たちであつた。

子ども達の行動にも問題を感じるけれ  
ど、それに対する大人がこうでは、子ども  
は自分のしていることが許されると認識し

てしまう。よくも悪くも、子ども達は大人のふるまいから何が許され、何がそうでないのかを学んでいく。

ある女子学生は、体調を崩したなどといって授業にこなくなつた。記録を読み返し、よくよく聞いてみると、子どもと接するのが苦痛だという。色んなことを頼まれて、いっさい断れないのだった。私は驚いて、「どうして?」と聞くと、「子どもを絶対に怒らせてはいけなと思つて」と言うのである。そのためビクビクしているようだった。子どもの要求は際限がないので、それにどう対していいのかわからず、結局、自分は子どもに嫌われていると思つていたのだ。自分の気持ちをちゃんととってもいいのだといったら、驚いたような顔をしていた。

### 敗者型の親と子ども

人はいつ親になることを学習するのだろうか。大学で心理学や教育学を学んでいてこの状況である。その昔、親になることは自然体でこなしていけるはずのこ

とであつた。誰にもできる、本能的で、自然発生的な行動と思われていた。しかし実は、それは本能でもなんでもなく、観察という社会的学習で支えられていたことが明らかになつた。その社会的学習が失われた今、「自然体」で臨むととんでもないことが起こる。

生活行動が世代間で断絶され、各世代をターゲットにする文化に振り回され、異文化と交わることを避けてしまつている社会の中で、お互いの関わりをどこでどう学習していけばいいのだろうか。

もし親が、子どもの機嫌を損ねることをおそれて接していたら、もし親が、子どもにきちんとしたことはで善悪を教えることに抵抗を感じていたら、子どもを尊重するということを間違つてとらえていたとしたら、もし親が、子どもによつていやな思いをしていても、それを子どもだからと我慢していたら、子どもは親から何も学ばなくなつてしまう。「親業」でいう「敗者型」で、自分の率直な思いを子どもに言えない親たちである。そういう親の場合、子どもは自分の判

断、自分の感情が一番大事なのだ、人はそれに従うのが当たり前だと学習してしまう。自分をコントロールしたり、相手の気持ちに気つくチャンスがなくなってしまう。

それは子どもにとって、生涯にわたる大きなハンディを残す。子どもは相手を自分の都合のよいように動かすことだけが最大の関心事になる。相手の思いに気付かない。相手と対等につき合えなくなってしまう。自分に対等に向かってくる相手に否定的な感情を抱いてしまう。子ども社会では、そういう相手がふつうだから、感情的に満たされない子どもになってしまう。自分が強く出ることしか知らない。ますます人は離れていき、さらに相手を強く支配していく方法をとるか、支配できる弱い相手を選び、強い自分という虚像にしがみつくことになる。あるいは、自信を失ってあきらめるかのどちらかになっていくようになっていくだろう。

### 強い自分でありたいという願い

弱い子ども・不安定な子どもが自分を守るために行う攻撃行動の他に、なんでもない子どもあるいはむしろ有能な子どもがこうした相手の優しさや弱さを利用した形で行う攻撃が、きっかけがあれば、すぐに出現するというのが、もう一つの大きな問題だと思う。

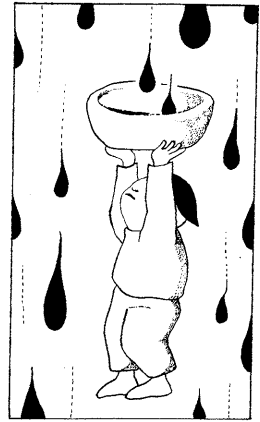
もちろん、こういう攻撃については、対等に向かつていけば、この問題は回避である。わからない子どもではないからだ。しかし、大人側の間違った対応が続けば、自己肥大の感覚を生み、弱肉強食の論理を学習させることになるだろう。

子どもが「強い・よい自分」でいたいと望むことはわかる。それは、自分が様々なことができるようになったり、我慢できるようになったり、よりよい自分に結びつく形で行われるべきだと思う。自分より弱いものを攻撃して勝って、「自分は強い」と虚像を得たところでなんの力にもならない。そんな子ども達が増

えている。なんでも自分が一番でない和不機嫌になつてしまふ子どももいる。自己の内容を充実することではなく、他者を陥れることを考えるようになってはおしまいだ。それで必死に大人に認めてもらふことを願っている。きょうだいによく起る現象だ。親が優劣でしかものを見ないとそうなる。

### 大人への警戒心

わたしも学生時代、実習に行っていた。しかしこななりにやりたい放題をする子どもはいなかった。遠慮のない子は確かにいたけれど、子ども達の中に大人に対する敬意のようなものもあつたし、それなりの期待を持つて接してきたくれたと思う。何よりも基本的には好意や親しみを寄せてきてくれた。それが今は、警戒心や不信任、さもなくば利用できるかどうかと見定めるように大人に向かつてくる子どもが増えた。これも、それまでの大人との人間関係で身につけたふるまい方だと思う。それは大人への不信任のひとつの形と



いえる。現代の子ども達はいへんな重荷をかかえていると思えてくる。

### 緊張感の中に暮らす子ども達

子ども達は昔と違って、非常な緊張感の中に暮らしている。並みの子どもでは、親は満足しないのである。いつも、自分が人よりよい子強い子でないと、親が不機嫌になるのである。幼児期から、たくさんのおけいごことに行つて、その場その場で、優劣を付けられている。その優劣に親たちが振り回されている。ずいぶん昔の話だけれど、よそのお宅に親子で遊び

にいったとき、子ども達はピアノを弾いて遊びだした。一人の子がどうやらグレードの高い曲を弾いていた。「まあ、〇〇ちゃんはどうこんな曲を弾いているの」と、その家の母の顔色が変わったことを覚えていた。そんなどうでもいいことで、幼児の品定めをし、自分の子どもをせき立てている。

子どもはかわいがられているという気がしないと思う。子どもは、よくわからないけれど、親が自分を不満に思っているらしいと感じる。子どもは自分に自信を持ってない。安心してものごとにとりかかれない。どんな評価がでるかに神経を使う。その時の親の感情をどうかわしていくかということに気を使っている。そのうつぶんをどこかで晴らしたいと思うのも無理はないと思う。

親の前ではとってもいい子だけど、幼稚園では攻撃的だったり、陰湿だったりという子がいる。学生のよいうに、気を使わないでもいい相手には、本音がでてしまう。学生でなく、反撃しない弱い子に向けることも

ある。

私は「早期教育」には、心底反対である。少々の技能は身に付くかもしれないが、失うものがあるに多すぎる。そのもっとも大きなものは、親子の自然な愛着関係に水を差すということだ。親が不機嫌になつてまでやらねばならぬことは、幼児期においてはない。

このご時世で、幼児期のおけいごことに背を向けるのは容易ではない。しかし、できないことはない。どうしてもやりたいのなら、決して競争させないことである。基本的なおけいごとは子ども本人の責任で通えるようになってからでよい。

幼児の攻撃性は、大人からの抑圧によって起こると私は考える。男児であれば鼓舞されることさえある。それは自己価値観に関わっていて、感情としてため込まれ、別の場所で発散される。攻撃性の自己コントロールは、幼児期に出会う重要な課題のひとつである。

(山口大学)